

8 水産業改良普及事業

技術改良試験（ノリの軟化法）

岩 田 静 昌

1. 目的

近年、硬い葉質を養殖及び製造工程で柔らかくする各種の手法が開発されて普及しているが、品質にどのような影響を及ぼしているのか不明な点が多い。そこで、主要なノリ軟化技術を取り上げ品質への影響を比較試験した。

2. 要約

- 1) 品種による成育および収量には若干の差が認められたが、製品間には著明な差はなかった。しかし、新品種の中には漁期後半になっても、つやのある製品が見られた。年度により環境変動が大きいので、単年度の試験で品種とその製品について結論を出すのは難しい。
- 2) 生産期における浮き流し網の干出は葉質を軟化させ、しかもアミノ酸が増え品質が向上する。ただし人工干出作業が省力化できる装置の開発と、地域全員が同時に実施することが大切である。
- 3) ノリの葉令による製品比較は、摘採回数が進むにつれ葉質が硬くなり品質は低下する。柔らかいノリは伸ばし過ぎないよう若芽摘みすることが必要である。
- 4) 原藻を冷却海水で攪拌して保蔵することは、時期および攪拌海水、時間により異なるが、葉質に合わせて攪拌すれば製品の向上につながる。なお、小型ヒート

ポンプは時期に関係なく海水温度を一定に保つことができる。

- 5) 生ノリ冷凍処理はノリの味が低下するので禁止している地区がある。しかし、2日以内の冷凍は細胞間物質の粘質多糖を減少させ、ノリの軟化には有効な手段である。しかし、塩分が冷凍することにより急激に低下するので、今後標準塩分になるよう工夫する必要がある。

3. 考察

- 1) 干出が製品向上につながるということがわかっていても普及率は低い、これは浮流網干出の作業性に問題があると思う。浮流漁場を育苗期に使い種網を分散すれば健全な冷凍網が確保できる。
- 2) 原藻を冷却する技術が58年度から急速な勢いで普及している。エア式、攪拌式、シャワー式等があるが、要は葉質に合わせて比重、水温をコントロールする必要がある。
- 3) 生ノリ冷凍はノリの塩分が低下する。また熟成機も同様である。そこで製造工程中に塩分を添加し、標準塩分にするのが望ましいが、製品の保管に問題が出る。
- 4) 軟らかいノリのために若芽摘みが良いことは広く知られている。しかし、1日の加工能力が15,000枚~25,000枚と大きくなると延ばして摘採する網が多い。

また、漁場の統一管理が地区ごとに行われているので、地域全体が集団管理を

施することが望ましい。

新技術導入試験 渥美外海ワカメ養殖試験

俵 佑方人・日比野 光

この課題は水産業改良普及事業の一環として実施し、昭和58年度技術改良試験報告書に詳述したので、ここでは要約のみとする。

1. 外海域の岩礁地帯はワカメ、アラメが繁茂しており、アワビの放流適地である。

しかし、ワカメ増殖対策として、アラメの除去が行なわれている。

2. 外海域は風波が強く、底質は砂地である。このため施設の保持が困難である。

3. アラメをアワビの餌料として保護するために、天然ワカメ採取から養殖に転換させるための試験を実施した。

4. 採苗はクレモナ撚糸、120径モジ網への遊走子付けによる方法、タッグピン及び親縄（軟撚 φ15mmナイロンロープ）へのフリー配偶体及び芽胞体の秋期直接採苗を実施

した。

5. 施設の固定法として、沖側岩礁を基点とし、陸上で他点を支持する方法と、60kgアンカー（コンクリートブロック）により、両点を支持する方法で行なった。

6. クレモナ撚糸及び120径モジ網への遊走子付けによる採苗法は良好であった。

フリー配偶体及び芽胞体による秋期の直接採苗は悪天候のため不調であった。

施設の固定法は沖側岩礁に支持点を取り、他点を陸上で固定する方法が荒天に対しても良好な形状が維持できた。

7. 本年の結果により、外海域でのワカメ養殖は施設をさらに改良し、養殖作業の省力化をはかれば定着すると考えられる。

アズマニシキの天然採苗と養殖試験

水 野 宏 成

本試験は技術改良試験報告書を作成しているので要約のみ記載した。

1. アズマニシキの天然採苗施設を用いて採苗を実施した。

2. 天然採苗施設は延縄方式とし、1セット12連で、1連は採苗器2個、三河湾の日間賀島、佐久島地先に5月中旬、5月下旬、6月上旬の3時期に分けて、1期4連ずつ、計2セット設置した。
3. 採苗器はアンドン型とした。採苗器の構造はトリカルネットで円筒型を保たせ、その中に4mm目合巾2.0m、長さ1.0mのスカイネットを詰め、全体をタマネギ袋とスカイネットで覆った。採苗器の長さは69cm、直径25cmである。
4. 採苗器は日間賀島地先では10月31日、佐久島地先では11月1日に取り上げた。
採苗成績は採苗器の設置時期による大きな差は見られなかった。強いて言えば、5月中に設置した採苗器が6月設置よりも良い結果が得られた。
両地先とも死貝を含めて、わずか41個採苗出来ただけである。
採苗器の付着稚貝は日間賀島地先が12個、佐久島地先が25個で、前者は死貝が70%、後者が40%を示した。
5. 付着稚貝の平均殻長は日間賀島地先が 24.16 ± 6.06 mm、佐久島地先は 20.11 ± 4.50 mmであった。最大殻長は前者が30.1mm、後者が29.7mmで、すべて殻長10mm以上であった。死貝については平均殻長、日間賀島地先が 15.0 ± 3.1 mm、佐久島地先が 16.41 ± 3.81 mmであった。
6. 採苗器内の付着生物は日間賀島地先ではムラサキイガイ、ヒトデ、佐久島地先ではシロボヤ、フジツボ、ナマコが優占種であった。
7. 養殖試験は天然採苗によって得られた37個の稚貝をホタテ籠に収容して、南知多町豊浜の分場地先で11月1日から行っており、11月1日の平均殻長21.5mmが3月3日の約4ヶ月間で32.5mmまで成長している。この間の歩留りは約90%である。

昭和58年度ノリ養殖の経過及び10号線について

俵 佑方人 ・ 日比野 光

1. 気象海況及び潮位

昭和58年度の本場における気水温及び降水量の観測結果は表1のとおりである。

(1) 気温

4月中旬から6月上旬にかけて高く経過したが、6月中旬から7月中旬には低く、冷夏を思わせた。しかし7月下旬から9月中旬までは猛暑となった。10月中旬から3月下旬までは全て平年より低く、特に59年1月中旬から2月中旬にかけて

は極端に下って、本場観測史上最低の記録となった。

(2) 水温

気温と同じような経過をたどった。6～7月は低めだったが、8月～9月上旬まで高く、中旬以降は平年並みかやや低目、59年1月に入ってから急激に下がり、特に2月は3℃台に下るなど新記録となり、オットセイが伊勢湾に姿を現わしたなどの異変が続いた。

(3) 降水量

6～8月にかけては平年より多かったが、9月は月末の台風10号まで雨が少なかった。10月以降、翌年1月までは少なく、特に11月は寡雨で日照が続いた。9月末の台風10号にともなった大雨と10～11月の日照過多はプロロセントラム・シグモイデス赤潮の大発生をもたらし、

ノリの色落ち等、品質低下の一大要因となった。

(4) 潮位変動

昭和57年9月～58年8月1年間の平均は名港検潮儀実測潮位で214cmであり、昨年と変らなかった。9月に入ってからの日変動は昨年と比べてはるかに小さかった。(名港管理組合観測資料)

表1 水試地先における気温、水温及び降水量の観測結果

	気 温 °C			水 温 °C		降 水 量 mm
	月 平 均	旬 平 均		月 平 均	旬 平 均	
58 4月	15.9 (15.3)	上 12.9 (13.6) 中 16.6 (15.7) 下 18.3 (16.6)	14.5 (14.4)	11.9 (12.4) 15.2 (14.6) 16.2 (16.2)	175.4 (138.7)	
5月	20.9 (19.8)	上 20.1 (18.9) 中 21.0 (18.9) 下 21.4 (21.7)	19.8 (19.3)	18.0 (17.9) 19.5 (19.4) 21.3 (20.7)	118.3 (184.0)	
6月	22.9 (23.5)	上 24.6 (22.5) 中 20.8 (23.4) 下 23.2 (24.5)	21.8 (23.0)	22.2 (22.1) 21.1 (22.6) 22.3 (24.2)	333.6 (179.1)	
7月	26.9 (27.1)	上 25.4 (25.9) 中 25.7 (27.3) 下 29.3 (28.1)	25.9 (26.8)	25.0 (25.4) 25.0 (27.2) 27.3 (27.9)	121.3 (149.2)	
8月	30.0 (29.0)	上 30.7 (29.5) 中 30.9 (29.0) 下 28.7 (28.5)	29.5 (28.5)	29.9 (29.0) 30.7 (28.9) 28.2 (27.6)	303.3 (212.8)	
9月	26.0 (25.5)	上 29.9 (27.2) 中 26.0 (25.8) 下 22.3 (23.6)	25.8 (25.5)	28.6 (26.8) 25.5 (25.7) 23.3 (23.9)	175.0 (213.6)	
10月	19.8 (20.0)	上 22.7 (21.6) 中 19.8 (20.0) 下 17.1 (18.5)	20.3 (20.5)	22.3 (22.0) 20.6 (20.6) 18.1 (18.8)	123.7 (178.9)	
11月	14.0 (14.9)	上 16.3 (16.9) 中 14.2 (15.0) 下 11.4 (12.9)	14.2 (14.8)	15.9 (16.8) 14.7 (14.5) 12.1 (13.0)	30.4 (104.5)	
12月	7.7 (9.0)	上 10.0 (10.3) 中 7.4 (8.8) 下 5.8 (7.9)	9.5 (9.3)	10.9 (10.7) 9.7 (9.1) 8.0 (8.0)	11.2 (41.2)	
59 1月	3.8 (5.9)	上 5.3 (6.4) 中 3.2 (6.0) 下 2.9 (5.4)	5.0 (6.1)	5.7 (7.0) 5.1 (6.1) 4.1 (5.1)	15.4 (31.8)	
2月	3.5 (6.4)	上 1.7 (5.7) 中 3.5 (6.3) 下 5.6 (7.1)	3.9 (5.9)	3.3 (5.3) 3.7 (5.9) 4.7 (6.5)	60.0 (58.8)	
3月	6.7 (9.5)	上 5.0 (8.2) 中 6.0 (9.4) 下 8.8 (11.0)	6.1 (8.6)	5.0 (7.4) 5.7 (8.4) 7.6 (9.9)	71.5 (124.1)	

()内は平年値

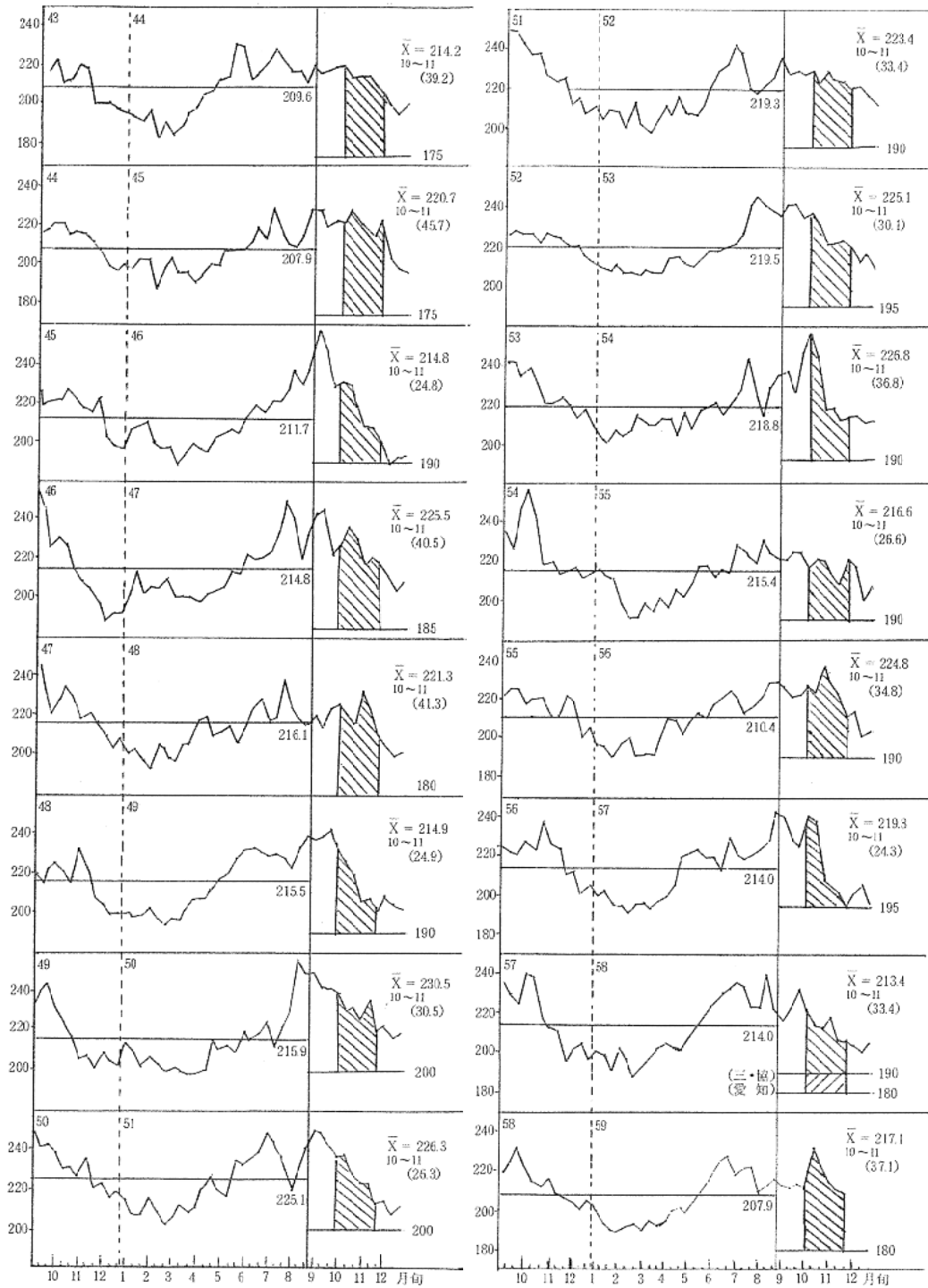


図1 年度別旬平均潮位と10号線
 () 内は10~11月平均潮位 - 10号線水位

2. ノリ養殖経過

(1) 概要

7～9月の平均気温は25.9℃と高く、また雨は8月下旬～9月中旬まで少なかった。これはいずれも豊作要因であり、また潮位変動も昨年より小さいと考えられたので、病害発生も少なく、技術的に易しい、いわゆる豊作年になることを予想した。結果は水温の順調な降下等で

ボ状菌やアカグサレ病の発生も少なく、多量生産年となった。全国的にも大豊作となり、質の劣化とも相まって低価格で経過し、生産金額は不作だった57年度を下廻り、典型的な豊作貧乏の年となった。年間生産枚数は約10億7千万枚、金額で129億円であった。図2に販売日別生産状況を示した。

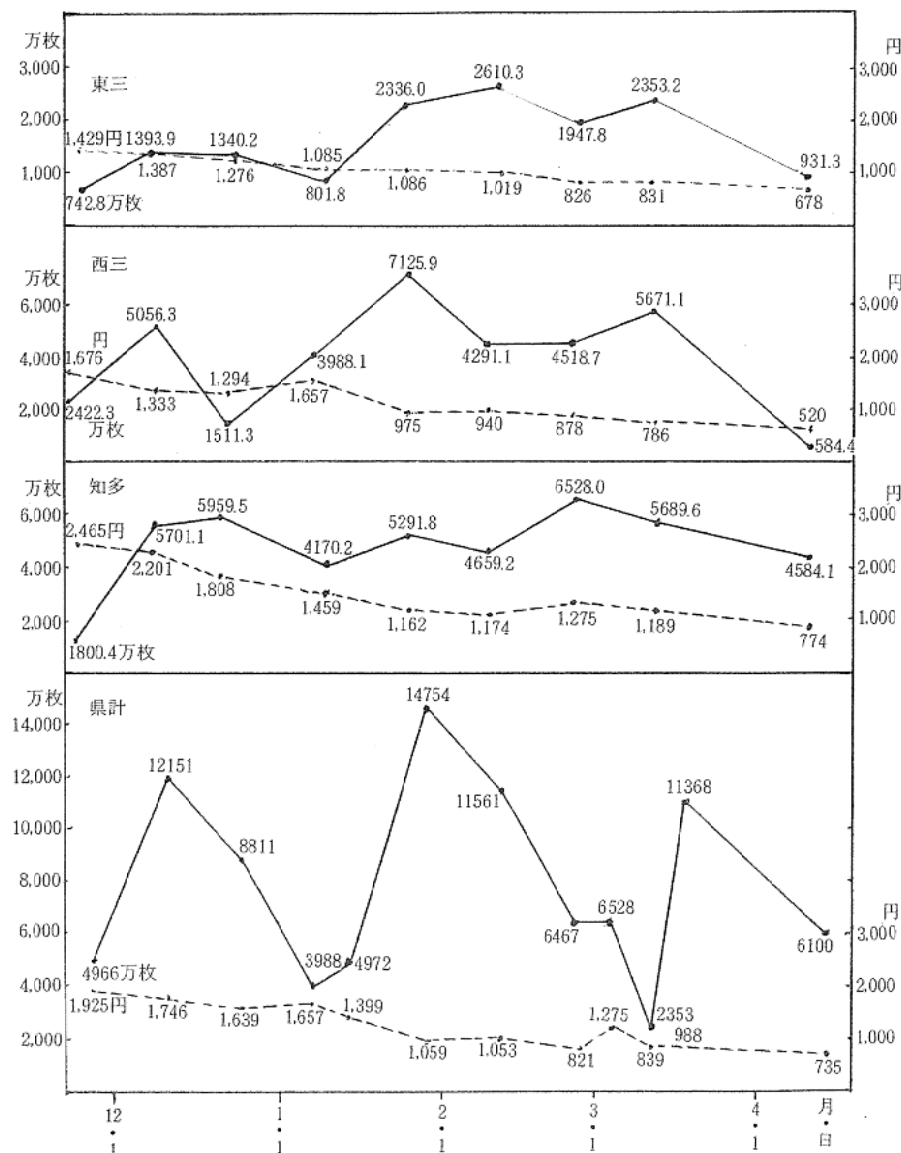


図2 販売日別生産

(—●— 生産枚数, - - - 平均単価)

(2) 採苗

9月下旬に入って急激に気温が下がり、糸状体からの大きな孢子放出の山があったが、9月27～28日の台風10号のため、採苗は見送られた。10月1日より採苗は始まったが、潮時も悪く、気水温も高かったため、全県的に薄付きであった。潮時の良くなった6日以降に本格的に採苗が行なわれたが、この頃急激に気水温も下がり、放出の大きな山に合致したため、その頃張り込まれたものは好成績で、むしろ濃い目の網が多かった。

(3) 初期生育

台風10号の影響で、10月中旬までは海況が良く、のり芽の生育は極めて順調であった。しかし中旬以降、今まで赤潮になったことのないプロロセントラム・シグモイデスが三河湾で大発生し、長期間、大規模な範囲で赤潮を形成した。そのため全湾的にのり芽の色落ちが激しく、特に幡豆～吉田にかけては致命的な被害を受けた。

(4) 病害発生、その他

プロロセントラム・シグモイデス赤潮の影響でのり芽の褪色が激しく、これの被害を受けた所もあったが、ツボ状菌症の発生は殆んどなく、アカグサレも見られなかった。11月下旬の降雨で、知多湾奥部や渥美湾奥部で、伸び切ったのり芽の色が回復するとともにアカグサレが発生し、局地的に全滅したところもあったが、例年に比べて被害は小さく、網の一斉撤去等は無かった。本年の特異事項として、伊勢湾でアイゴが異常増殖してのり養殖漁場に押し寄せ、のり芽を食害して大きな話題になった。

(5) 冷蔵入庫

本年は採苗及びその後の初期生育も順調に経過し、病害発生も殆んど無かった

ので、入庫前ののり網は健全で良質なものが大部分を占めた。10月中旬以降、前記赤潮の大発生があり、これの被害をさけるため入庫を急いだのが幸いして、10月一林ではほぼ50万枚の健全なのり網を冷蔵入庫することが出来た。しかし幡豆～吉田地区にかけては濃厚な赤潮が長期間滞留したため芽傷みがひどく、冷蔵入庫は不調に終わり、その後の生産も質、量ともに極めて不振であった。

(6) 浮き流し

昭和57年度は秋～冬にかけて潮位の日変動が激しく、降雨もあったので、浮き流しは極めて良好であった。しかし本年は潮位の日変動が小さく、雨も降らずで日照過多となり、貧栄養で色落ちが激しく、付着ケイソウの着生も多く、質、量ともに全県的に不良であった。

(7) 秋芽生産

年内に約2億6千万枚、45億と好調な生産であった。本年は浮き流しや沖部漁場が悪く、河口部やタカの支柱漁場が主体であった。色落ちで摘み控え、伸び切ったところへ雨が降り、色が回復したとたんアカグサレが発生し、収穫し損なった地区が多かった。

(8) 年明生産

健全で良質な網を確保していたので、年明け後は順調な生産が見られた。しかし1月に入ってから水温低下が著しく、それが長期間続いたため伸びが悪く、降水も無かったので、品質が劣化し、全国的な豊作ともあいまって低価格となった。

3. 本年の10号線設定について

本年各漁協に連絡した10号線の算出法については、昨年までと異なる方法を用いたので、その方法について記す。

10号線は天然採苗時代、10月上旬の張込

期に天然孢子が最も着生し生残する水位として、倉掛、熊田等により、名古屋港潮位表115cmと定められた。この水位は毎年愛知県漁連が発行している潮位図に採用されており、本県ノリ養殖の基本水位となっている。この水位は、10月上旬採苗期の後れ三日潮の日中4時間20分の干出線で、これはまたその潮のほぼ小潮干潮線である。人工採苗の普及している現在、孢子着生の面からすれば、この水位は意味をなさないが、孢子や発芽体の生残、その後の生育という面からすればやはり有用で、基本水位として重要である。

今年の10号線設定については8月23日に県下各漁協で潮位観測を行ない、その最干潮水位と最満潮水位及びその時刻から潮位曲線を求め、それを名古屋港潮位表8月23

日潮位曲線と対比させ、その115cmの水位の干出時間にあたる水位をそれぞれ求めて各地の10号線とした。したがって漁連発刊の昭和58年度潮位図に記載されている10号線の水位そのものである。ちなみに名港管理組合観測の検潮儀実測値では178cmとなり、三重県と協議して決定された10号線水位(190cm)より12cm低かったが、その後の潮位変動の動向からみて180cmを適当と考え、その旨各漁協に連絡通知した。結果は図2に示したように、10~11月平均潮位との差は33.4cmで、これは31年以降の10号線位置(10~11月平均潮位-10号線)の平均値(33.8cm $\bar{x} = 7.3$)にはほぼ同じであった(図4参照)。ちなみに、竹島漁協を例として、図3に算出法を示した。

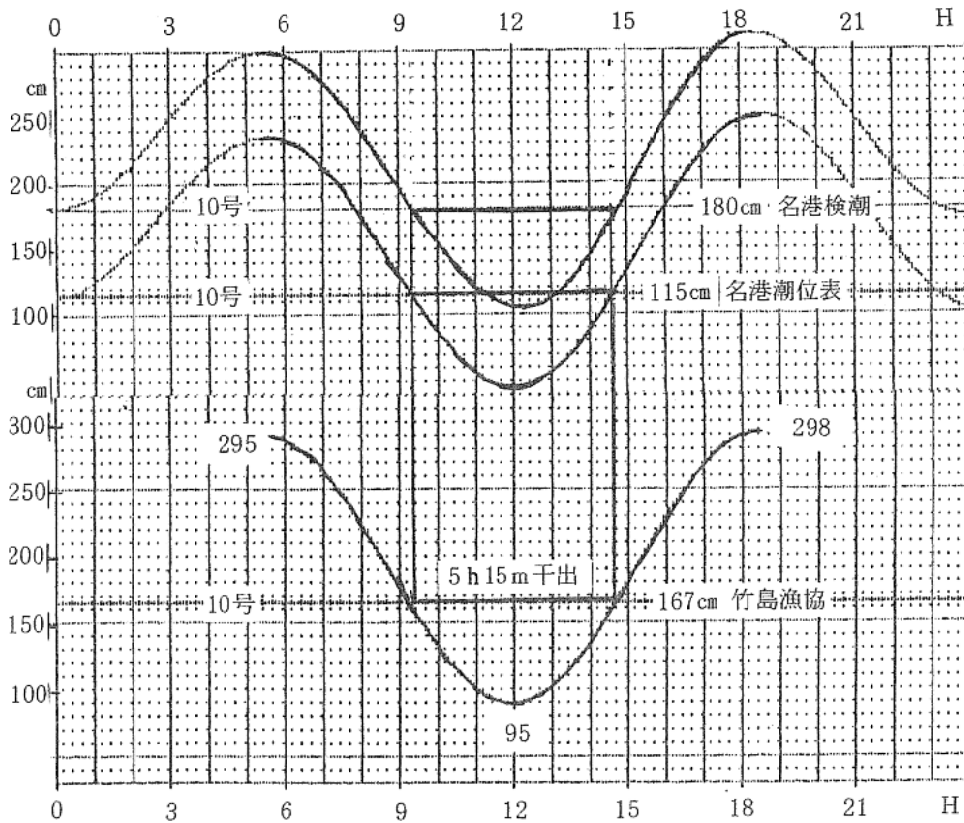


図3 竹島漁協における10号線算出法

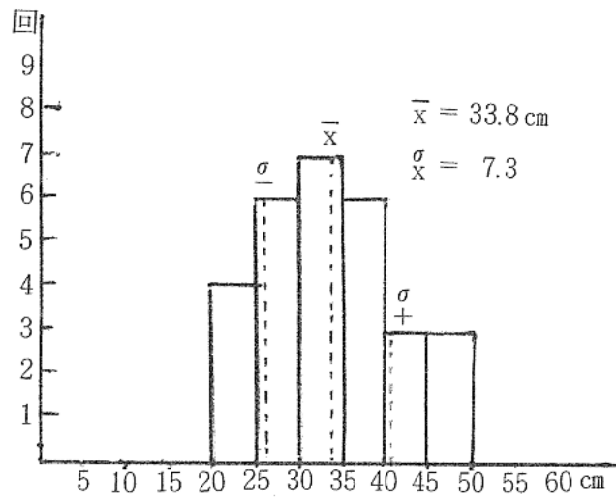


図4 10号線位置（10～11月平均潮位－10号線水位）別頻度数

9 漁業後継者対策事業

交 流 ・ 学 習 事 業

目的

青少年グループの活動意欲を高めるため、研究発表会及び他県との技術交流をはかることにより、地域の生産技術の向上、経営の改

善等についての討議の場として、活動実績発表大会を開催し、活動実績を交流するものとする。

結果

(1) 活動実績発表大会

名 称	主要発表内容	開催場所 (会場等)	開催時期 または 開催期日	参 加 人 員	審 査 員 ・ 助 言 者 または、依 頼 先
第30回愛知 の水産研究 発表大会	漁村研究グループ1ヶ年の自主的研究活動の成果を発表し、漁村生活の改善に寄与する。 大会は漁業・養殖・婦人グループ活動等の総合発表形式をとった。 (発表11題)	名古屋市 愛 知 県 水産会館	昭和58年 4月27日	420名	愛知県水産試験場 場 長 木村 金雄 副 場 長 熊田 潮 尾張分場長 徳本裕之助 専門技術員 日比野 光 愛知県農業水産部 水産振興室 主 幹 梅田 孝典 愛知県漁業協同組合連合会 常 務 吉田 秋年 愛知県信用漁業協同組合 連合会 常 務 荻山 清

(2) 学習会
技術修練会

名 称 (種 類)	開 催 場 所 (会 場 等)	開 催 時 期 又 は 開 催 期 日	参 加 人 員	講 師	
				所 属	氏 名
グループリーダー研修会	名古屋市 (愛知県水産会館)	58年 4月21日	150名	水産庁振興部 水産庁振興部 全国沿岸漁業会 振興開発協会	飯田 実 石川 賢広 山根 隆幹
栽培漁業 研修会	知多郡南知多町 (豊浜漁協)	58年 6月17日	50名	愛知水試	水野 宏成
	常滑市蒲池 (鬼崎漁協)	58年 6月18日	50名	愛知水試	水野 宏成
	半田市 (いすず会館)	58年 10月27日	25名	愛知水試	水野 宏成
藻類養殖 技術修練会	幡豆郡一色町 (一色町公民館)	58年 8月11日 ～8月13日	127名	愛知水試 愛知水試 愛知水試 全国海苔漁連 愛知県漁連 愛知水試 愛知水試 近畿大学 佐賀県有明水試 愛知水試	伏屋 満 鈴木 輝明 横江 準一 青柳 輝男 杉浦 義文 熊田 潮 俵 佑方人 榎 彰徳 木下 和生 岩田 静昌
ノリ予報会議	名古屋市 (愛知県水産会館)	58年 9月21日	100名	名古屋气象台 東海大学 愛知水試 愛知水試	渡辺 俊夫 工藤 盛徳 俵 佑方人 岩田 静昌
魚類養殖 技術研究会	蒲 郡 市 (愛知県水産試験場)	58年 10月31日	150名	養殖研究所 宮城大学	原 武史 川津 浩嗣
魚礁研究会	知多郡南知多町 (師崎漁協)	58年 12月1日	50名	愛知水試	水野 宏成
貝類養殖 技術修練会	知多郡南知多町 (師崎漁協)	59年 3月24日	30名	養殖研究所 愛知水試	田中弥太郎 水野 宏成

少 年 水 産 教 室

目的

県下の漁業地域の義務教育課程にある生徒で、水産に興味あるものを対象に実習を通じ、

基礎知識を習得させるとともに、後継者育成のため夏季休暇等を利用し、集団指導を行う。

結果

名 称 (種類)	開 催 場 所 (会 場 等)	開催時期 又は 開催期日	参加人員	講 師	
				所 属	氏 名
少年 水産教室 夏期講座 (研修内容) 水産の話 ロープの結び方 魚貝類の増養殖 救急法 顕微鏡実習 採集標本の作り方 映書「栽培の海」	鬼崎漁業協同組合 (常 滑 市)	昭和58年 7月28日 ～29日 (2日間)	42名	内 海 高 校	南部光義
				竹島漁業協同組合	大西興一
				〃	半田 一
				水産振興室	玉越紘一
				常滑市消防本部	寺島 明
				〃	角野正昇
	愛知県漁民研修所 (蒲 郡 市)	昭和58年 8月2日 ～3日 (2日間)	13名	〃	野崎日出吉
				愛知県水産試験場	専門技術員
				愛知県知多事務所	改良普及員
				水産振興室	玉越紘一
				竹島漁業協同組合	大西興一
				〃	半田 一
吉田漁業協同組合 (幡豆郡吉良町)	昭和58年 8月4日 ～5日 (2日間)	45名	蒲 郡 市 消 防 本 部	大村文夫	
			〃	尾崎英行	
			〃	杉浦喜夫	
			愛知県水産試験場	専門技術員	
			愛知県東三河事務所	改良普及員	
			水産振興室	玉越紘一	
竹島漁業協同組合	大西興一				
〃	半田 一				
幡豆郡消防組合 消 防 本 部	服部守義				
〃	板倉孝幸				
〃	加藤 悟				
愛知県水産試験場	専門技術員				
愛知県西三河事務所	改良普及員				

10 漁民研修所及び漁民相談

愛知県漁民研修所

昭和58年度愛知県漁民研修所実績（月別）

月	研 修 項 目	開 催		参 加 者 延 人 員
		回 数	日 数	
4	水産業改良普及職員研修	3 回	3 日	50 人
	研究グループ研修	4	4	35
	水産技術交流研修	3	3	5
	小 計	10	10	90
5	水産業改良普及職員研修	2	2	14
	研究グループ研修	4	4	21
	水産技術交流研修	3	4	9
	その他研修	3	8	22
小 計	12	18	66	
6	水産業改良普及職員研修	2	3	40
	研究グループ研修	6	6	21
	水産技術交流研修	3	3	10
	その他研修	1	2	6
小 計	12	14	77	
7	水産業改良普及職員研修	2	2	48
	研究グループ研修	6	6	19
	水産技術交流研修	4	4	29
	その他研修	3	12	63
小 計	15	24	159	
8	少年水産教室夏期講座	1	2	26
	研究グループ研修	5	5	17
	水産技術交流研修	3	3	11
	その他研修	3	7	13
小 計	12	17	67	
9	水産業改良普及職員研修	1	1	6
	研究グループ研修	6	6	28
	水産技術交流研修	1	1	1
	その他研修	2	4	4
小 計	10	12	39	

月	研 修 項 目	開 催		参 加 者 延 人 員
		回 数	日 数	
10	水産業改良普及職員研修	2 回	2 日	1 2 人
	研究グループ研修	8	8	1 2 2
	水産技術交流研修	2	2	3
	そ の 他 研 修	1	3	6
	小 計	1 3	1 5	1 4 3
11	水産業改良普及職員研修	1	1	4
	研究グループ研修	5	5	2 0
	水産技術交流研修	3	3	2 6
	小 計	9	9	5 0
12	水産業改良普及職員研修	2	2	5
	研究グループ研修	6	6	2 4
	水産技術交流研修	4	4	8
	そ の 他 研 修	1	2	4
	小 計	1 3	1 4	4 1
1	水産業改良普及職員研修	2	2	1 5
	研究グループ研修	6	6	1 7
	水産技術交流研修	4	4	1 8
	そ の 他 研 修	1	1	1
	小 計	1 3	1 3	5 1
2	水産業改良普及職員研修	3	3	1 5
	研究グループ研修	7	7	4 8
	水産技術交流研修	5	5	1 3
	そ の 他 研 修	3	8	1 6
	小 計	1 8	2 3	9 2
3	水産業改良普及職員研修	3	3	1 8
	研究グループ研修	8	8	4 6
	水産技術交流研修	5	5	1 4
	そ の 他 研 修	4	9	1 4
	小 計	2 0	2 5	9 2
合 計	水産業改良普及職員研修	2 3	2 4	2 2 7
	少年水産教室夏期講座	1	2	2 6
	研究グループ研修	7 1	7 1	4 1 8
	水産技術交流研修	4 0	4 1	1 4 7
	そ の 他 研 修	2 2	5 6	1 4 9
	合 計	1 5 7	1 9 4	9 6 7

昭和58年度愛知県漁民研修所利用実績

項 目	利 用 実 績			
	回 数	人 員	日 数	参加者延人員
水産業改良普及職員研修	23 ^回	220 ^人	24 ^日	227 ^人
少年水産教室夏期講座	1	13	2	26
研究グループ研修	71	418	71	418
水産技術交流研修	40	145	41	147
そ の 他 研 修	22	49	56	149
計	157	845	194	967

漁 民 相 談

目的

近年、養殖に関する相談、或は水質悪化に伴う諸問題、その他水産全般に関する相談が多くなっている。内容からみても養殖技術から魚病、公害に至るまで多種多様であり、水試の研究課題では対応しきれないので漁民相談員（非常勤嘱託）を配置して広く内外の情報を集め、時には巡回相談も行って有効適切な相談に対処する。

方法

漁民相談の窓口事務は昨年と同じで毎月第1水曜日は豊田事務所、第4水曜日は足助事務所の夫々管内の山間地域の養魚場を巡回し、また第2水曜日は、内水面分場鳳来養魚場を窓口として淡水魚関係の相談を担当し、その

他は本場において、電話、文書および、来訪者による相談にも応じている。

結果

本年度の漁民相談については、相談員の貝塚博氏が8月6日、心筋梗塞により急逝されたため、9月以降の相談業務については、巡回相談および、魚病関係については内水面分場が行い、その他の電話、文書および来訪者に対しては本場普及指導課を窓口とした。

その結果、本年度の漁民相談は実績表のとおりで巡回相談を含めて145件を取扱い、昨年度の160件より若干減少となった。

本年度は淡水養殖における魚病相談が46件と最も多く、中でもウナギのパラコロ病などの斃死対策としての技術相談が多かった。そ

の他、本年の特色として淡水魚養殖関係では
テラピア、スッポン養殖の新規養殖計画、海

産魚養殖関係では、ヒラメ、クルマエビの養
殖技術相談が増加したことである。

昭和58年度漁民相談実績表

自 58. 4. 1
至 59. 3. 31

項目 \ 月別	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	計	摘 要
水田利用 再編成対策			1										1	タニシ、ドジョウ
淡水魚養殖	1	3	3	4	1		1			1			14	コイ、アユ、ニジマス ティラピア、ニシキゴイ ドジョウ、スッポン ウナギ
貝類、海藻、 えび類	1	2	2					1	1	1	4	3	15	アサリ、クルマエビ、 ゴカイ、ノリ
養殖施設	1	2					2	1	1				7	ニジマス、ティラピア アユ、ウナギ
魚病対策	1	4	4	3			7	10	7	9	1		46	コイ、キンギョ、 ウナギ、ニシキゴイ、 ニジマス、アユ
公害関係														
種苗斡旋	2	1										1	4	アユ
流通加工														
へい死 原因対策														
小 計	6	12	10	7	1	0	10	12	9	11	5	4	87	
そ の 他	4	3	5	2	4	4	3	2	2	1	1	1	32	
巡回相談	2		10	3	1		3	3	2	2	0	0	26	豊田、足助事務所、 鳳来養魚場管内
合 計	12	15	25	12	6	4	16	17	13	14	6	5	145	